

Learning From the Old Education of English

最近の日本の英語教育はコミュニケーションを重視する傾向にある。「英語脳」なるものがもてはやされ、テレビや書店に並ぶ英語学習関係の本もそれに関連するものが多いように思う。別に、コミュニケーションを重視するのは悪いことではない。英語が言葉である以上は、人とのコミュニケーションのための道具であるからだ。しかし、コミュニケーションを重視する一方で、今の日本人は基礎となる英文法を軽視しすぎる人が多い。特に、学校や塾で習う英語は「受験英語」と批判され、そのうえ、英会話には役に立たないと言われることすらある。だが、基礎である文法がしっかりしていないのに、英語力が高いと言えるのだろうか。

英文学者の斎藤兆史の著書を参考にして、文法が大事であることを見てみたい。彼は著書「英語達人列伝」や「英語達人塾」のなかで、明治時代の英語の達人たちについて取り上げている。彼によると、明治時代の英語の達人は今よりはるかに少ない英語の教材しかない中で、英語を母語とする人たちよりも巧みに英語を使いこなしたというのだ。そんな彼らの勉強法とは、多読や素読などコミュニケーションより文法を重視した勉強だったという。また、斎藤によれば、英語の達人の誰もが、素晴らしい努力家だったということだったらしい。

今は明治時代に比べて、教材も多く、英語圏の人々と触れ合う機会も増えている。だから、明治時代の人たちと比べてしまうのは必ずしも正しくはないかもしれない。しかし、英語をなかなか話せる場がない中で、地道に文法の勉強し、英語力を高めていった人たちがいたことを考えると、文法の勉強や地道な努力が軽視されるものではない。今の日本人も「受験英語」と揶揄することなく、文法に目を向けて、地道に努力をしていくべきだ。